十四年（一八一七）英華堂刊の江馬元弘訳篇『和蘭医方纂要』四巻があった。このことは隆甫が藩公と蘭学を通じて接点があったと考えさせるに十分な史実であるが、これらの蘭学資料が現在どこにあるのかは未調査である。

その三、市河家の出身地と遠州地方の種痘に関する問題。市川隆甫は文政八年（一八二五）に京都へ遊学したが、その往復において駿河国小諏訪の市河魯庵と親しくなり、弟の蘭好死後、魯庵を招いて藩医にすえた。この魯庵の出身地は駿東郡片浜村字小諏訪で、東海道に沿った村落。彼自身の従弟もおり、町人の兄は沼津に、そして後妻の先夫（湯山氏）が沼津藩水野出羽守の家来であった。かように三島、沼津地方は魯庵のかつての診療圏であった点もあり、彼が天保三年（一八三二）から三年間長崎へ留学したとき、その往復でこの地方の医師と交流したと考えられる。

特に遠州榛原郡平川村の川田鴻斉は魯庵の弟子であり、遠州の種痘はまず川田家に伝来したというが、魯庵の帰国は天保六年（一八三五）であるので、モーニッケ牛痘苗の来日より十四年早い。従って魯庵が牛痘苗を遠州に持ちこむとは考えられない。シーボルトの種痘の話をした程度であろう。嘉永二年（一八四九）頃に遠州に牛痘苗を持ちこめる人物は、二代目市川隆甫以外に居ないのである。

天保八年（一八三七）に市河魯庵が死去すると、後妻の連れ子・恭斉は市川隆甫に養われ、翌年隆甫が死去すると、藩医中村見外の孫・栄達を入れ市川家を継がせた。そして市河恭斉は魯庵の跡をついだ。中村栄達は市川家をついで二代目隆甫となり、相続後、江戸の鮎沢因禎という医師に学び、後に家譜上の甥、恭斉の子・玄智に種痘術を教えている。

この玄智は佐倉順天堂に学び、明治になって顕道と改名し種痘医の免許をとり、後に性病医となって公立小田原黴毒病院に勤務し、囚獄医も兼務して小田原の医療につくした。この顕道の子・顕純が明治三十一年（一八九八）、本郷春木町に市河思誠堂という医療器械店を開き、日本医科器械学会の設立、維持に多大な功献をしたのであった。

（平成十六年四月例会）

❋❋❋紹　介❋❋❋

ジョン・ダフィー著　網野豊　訳

『アメリカ医学の歴史　ヒポクラテスから医科学へ』

本書は、アメリカ医史学界の泰斗であったジョン・ダフィー（John Duffy）の From Humors to Medical Science A History of American Medicine の邦訳である。ダフィーは、トゥレン大学医学部医史学名誉教授、メリーランド大学名誉教授であり、アメリカ医史学会会長をもつとめた文字通りのアメリカ医史学の第一人者であった。一九九一年には同学会の終身優功賞を受けている。一九九六年に逝去するまで数多

くの医史学に関する著作を著しているが、特にアメリカ公衆衛生史の発展を論じたThe Sanitarians: A History of American Public HealthやThe Healerなどは多くの著者を得ている。

西洋医学史といえばヨーロッパ中心の歴史記述が多い中で、ダフィーの著作はアメリカ医学の諸領域を広くカバーしている点で他の追随を許さないであろう。そのダフィーがいわばアメリカ医学の通史として著したのが本書である。原書は四百十八頁と分量的には手頃であるが簡に過ぎず繁にわたらず要を得た名著といってよい。

原書の主題が訳書の副題となっている点は興味深いが、原書の主題From Humors to Medical Scienceは「体液説から医科学へ」と直訳できるが、まさにこの副題こそが西洋諸国の中で最も遅くヒポクラテス医学と接し、かつ長くその医学を伝えてきたアメリカが十九世紀半ば以降にドイツ医学などに学び急速に科学化し、二十世紀の半ばには世界で最先端の医科学を擁するにいたった歩みを端的に象徴している。

邦訳書にしたがって、本書の構成をみておくことにしよう。「はじめに」に続いて「第一章　アメリカ医学の起源」「第二章　十八世紀」「第三章　医療専門職」「第四章　独立革命時代の医学」「第五章　十九世紀初頭の医学」「第六章　変則医と家庭医学」「第七章　アメリカ外科学のいしずえ」「第八章　内科学と外科学の初期の指導者」「第九章　医師の教育・認可・地位」「第十章　南北戦争時代の医学」「第十一章　近代医学の出現」「第十二章　外科学の開花」「第十三章　医学教育」「第十四章　医療専門職の組織化」「第十五章　前進する医学の最前線」「第十六章　第一次世界大戦以降の外科学と医療技術」「第十七章　フレクスナー報告以後の医学教育」「第十八章　医学に携わる女性」「第十九章　医学に携わるマイノリティ」「第二十章　二十世紀の医療専門職」「第二十一章　地域社会の健康」「第二十二章　医療はどこまで進むのか」の二十二章と原注および文献からなっている。

浩瀚な内容にわたる本書を限られた紙幅で網羅的に論評することはもとより不可能である。ダフィーの歴史叙述の方法的特色でもあるが、アメリカ医学の展開を単に医学上の発見、医師制度や医療制度の展開、公衆衛生施策の史実を並列的に取り上げるのではなく、そこに関わった医学者や科学者、行政官らの生き方、例えばアメリカのヒポクラテスと称されたベンジャミン・ラッシュや、メイヨークリニックの創始者メイヨー一族、アメリカ医学教育の父といわれるエイブラハム・フレクスナーらのライフヒストリーを巧みに交錯させて叙述していく点がきわだっている。それが本書を医学史書としてユニークな性格のものにしているとともに、アメリカ医療文化史、あるいは社会文化史としても味読に耐えるものとしている。また、従来のアメリカ医学史の中では十分に触れられてこなかった家庭医学や変則医、具体的にはトムソンによるトムソニアニズム（トムソン主義医学）やサミュエル・ハーネマンによってドイツで流行し現在においても信奉者を

もつホメオパシーなど通常の医学史では軽視されがちな対抗文化についても必要な紙幅を割いている。

とはいえ、本書の第一の価値は、西洋の中では遅れた自然主義的医学から、およそ一世紀半ほどの間に世界最先端の医科学へと変貌したアメリカ医学の学問史的検討にある。アメリカ医学の発展に多大な影響をおよぼしたアメリカ医師会（AMA）やロックフェラー財団、カーネギー財団の活躍などアメリカ合衆国らしい医学振興や医師の地位確立といった社会的側面に触れながら、医学理論と治療の進歩について丹念な検証を行っている点では類書を圧する。なお、敢えて難をいえば、エレミュエル・シャタックらによって先導された衛生改革をはじめとするアメリカ公衆衛生の展開について、もう少し論じてもよかったのではあるまいか。ダフィーの得意とするところだけにかえって抑制的であったのかもしれないが、望蜀の類であろうか。

最後になったが、訳業について賞賛を惜しむことはできない。さなきだに長編の研究書であるのにもかかわらず、訳者の網野はきわめてわかり易い邦語訳を行っている。テキストに忠実であるとともに、アメリカ医学についての深い造詣がなければできない訳業である。特に、訳注はアメリカ医学の専門外の人間にとってアメリカ医学の全容が理解しやすいように工夫されている跡がよくわかる。本書がもし多くの人に手に取られるとするならば、そしてそうあれかしと切に願ってやまないが、それは原書のもつ珠玉の価値とともに、訳業の精巧であることにまた多くを負っているといわねばなるまい。

（瀧澤　利行）

〔二瓶社、大阪市住吉区山之内二―七―一、電話〇六―六六九三―四一七七、二〇〇二年十月、A五判、四六九頁、本体四八〇〇円〕

篠田　達明　著

『モナ・リザは高脂血症だった』

ある物事を医学的観点から眺めたり、分析すると意外な一面が現れ――、ときには露呈されるので興味が尽きない。本書はそうした一冊で、筆者の篠田達明氏は整形外科の専門医にして、数々の小説を発表している作家である。

本書のサブタイトルは「肖像画29枚のカルテ」である。肖像画を患者にみたてカルテを作成しようという意欲的な試みに満ちている。

歴史的に有名な人物の肖像画や彫像について、筆者は「それぞれの人物の表情や体形が克明に写しだされる。絵には生命があり、描かれた人物もまた生命体であるからには生老病死がそこにあらわれぬはずがない」と書き、絵画として鑑賞するだけでなく、医学的見地から検証すれば、そこに隠された情報を読みとることができると考える。